Vol.189　印象派オルセー美術館から西紀の大移動展を見る　（平成22年8月10日）

年間３００万人もの人達が印象派を中心とするオルセー美術館を訪れます。
その余りにも多い見学者にギャラリーの痛みが激しく、今修復工事が行われています。

そのチャンスにオルセー美術館から、モネ、セザンヌ、ドガ、ゴッホ、ゴーギャン、ルソー等の１１５点の名画　が六本木新国立美術館へ空前絶後、「ベストオブオルセー」と２度と日本では見られない「オルセー美術館展２０１０ポスト印象派」が８月１６日まで開かれております。

私は偶然７月１７日テレビでオルセー美術館展の長時間特集を見るチャンスに恵まれ、翌日家族兄弟達６人を引き連れて参りました。着いたのは丁度１０時半頃でしたが入口に「入場まで６０分」と張り札がされ、大群衆で埋もれておりました。
大混雑の時はこれが１番と、入り口で解説イヤホンを全員に着けさせました。予想通りイヤホン効果は大成功でした。

会場は第１章から第１０章までに分けられて、第１章は「モネの日傘の女」「ドガの階段を上る踊り子」、光のモネ、デッサンのドガと言われますが、実物を目の前で見る「これが本物か・・・」と言うすばらしい緊張感、世界の名画と対峙する雰囲気、陶酔感がありました。

第２章はスーラでした。点描で画かれたヌードの女性は油絵の混濁な美しさと異なって、一つ一つの絵の具が持っている純粋な色を鮮やかに表現しておりました。
私は顔を近づけて根気のいる丹念さに感心するしかありませんでした。

第３章、パウロ、セザンヌは自然の印象派ではなく、構造を解読した画家と言われ、「リンゴ、山、奥さん」をモデルに描いたものが多く、構図、タッチ、色彩と言う絵画の要素を成立させた現代絵画の父と言われます。
この頃、サロン（官展）ではセザンヌを囲んでの話題が伝えられて居ります。

第４章ロートレック、人にはそれぞれ好き嫌い興味があって、私は彼の絵の遊女や踊り子の記憶はありましたが、余りにも混んで来たので遠くから見るだけで通り過ぎました。

第５章はゴッホの「星降る夜」、ゴーギャンの「タヒチの女たち」が並んで、印象派によって始まった色彩革命・・・その率直な色使いが私にもよくわかりました。

第６章、ボン、ダヴェン派、第７章ナビ派、第８章モロー、ルドン、第９章ルソーの「戦争」、第１０章、離れた純粋美術を生活の場へと変えた「装飾の勝利」でした。

私もガラクタ骨董を集めて３０年。
金が盡きて、今度は好きな古陶の写し作りを始め２０年が過ぎました。

先祖代々培って来た水産業を不本意に捨て、転業以来先が見えない不安と悩み、現実の厳しく辛い毎日を乗り越えて来たものは、仕事が終えて夜中の１時過ぎから酒に酔い、朝方まで作陶してよく亡き妻に叱られたものでした。

商売は時に、家族がありながら孤独になり、孤立する時があります。
その時どれだけ感性、情緒感を人は心に持っているかが大切であります。

昔から経済が繁栄した国で、文化が生まれなかった国はやがて滅びると申します。

本物を見る、仕事以外に何かを作る事は、現代人の大敵である「ストレス」を吸収してくれます。

趣味・娯楽を遊びと言わず、ストレスの特効薬として生かして下さい！

「不況の特効薬は本を読むこと・・・」　丹羽宇一郎